

〈論文〉

『百年の孤独』の豚の尻尾再考
——先住民の周縁化をめぐる動物化の主題と修辞——

山 内 玲

序

ガブリエル・ガルシア＝マルケス (Gabriel García Márquez: 1927–2012 以下 GGM と記す) の代表作『百年の孤独』 *Cien años de soledad* (1967) は、豚の尻尾に始まり豚の尻尾に終わるといっても過言ではない。インセストの結果尻尾の生えた子供が産み落とされるというその顛末は、一族の終焉となり物語を締めくくる。この有名な結末を象徴する豚の尻尾は、第1章に暗示されたのち作中全体で反復的にあらわれる中核的な要素を構成している (全20章からなる本作に章番号は付されていないが、便宜的に以下章番号を付す)。にもかかわらず、従来の研究では、尻尾そのものの意義は軽視され、もっぱらインセストに議論の関心が集中してきた。

しかしながら、近親間の性愛という主題に囚われた読者は、作品全体を通して読み、以下のような性愛の含意を持たない豚の尻尾の記述に直面するとき、その意義をうまく説明することはできない。

Sus exageraciones eran apenas comparables a las de Arcadio y Amaranta, que ya habían empezado a mudar los dientes y todavía andaban agarrados todo el día a las mantas de los indios, tercos en su decisión de no hablar el castellano, sino la lengua guajira. ... Y mientras [Úrsula] se lamentaba de su mala suerte,

convencida de que las extravagancias de sus hijos eran algo tan espantoso como una cola de cerdo, ... (GGM 1967: 55)

金銭を王水で溶かして金メッキとするアウレリャノの振る舞いを度外なものとした上で、それをはるかに超える奇行とみなされるのが、アマランタとその甥アルカディオの振る舞いであった。その振る舞いとは、スペイン語を話さずに、頑なに先住民言語を話し続けるという決意であり、豚の尻尾を想起させるほどに恐ろしい行為として示される。こうした奇行自体にインセストを巡る性的な含意を見出すことは無理であろう。

ではどう読まれてきたのか。このくだりを読む読者の代表例として、初期のガルシア＝マルケス研究の一角を担うカルメン・アルナウの解釈を参照し、その解釈に孕む問題を指摘したい。この場面を巡るその解釈は、インセストを主軸としており、それをブエンディア一族の呪いとした上で、その血筋の初期から見られた呪いの兆候として、小説第2章で豚の尻尾に例えられる長男の男性器のくだりに加え、先のくだりを引用している (Arnaú 1971: 93)。こうした解釈の問題点は、2点に整理できる。1点目はインセストを解釈の中心に据える読解の根底にある西洋中心主義である。西洋の文化的伝統に根差したエディプスの神話の系譜に『百年の孤独』を位置づける批評の問題は後に詳しく見ていくが、ここで確認したいのは、性的不道徳に代表される罪を象徴するだけの単なる符号以上の意味を尻尾に求めない態度である。こうした態度は、具体的な記述内容の抽象化に伴う細部の軽視という2点目の問題を誘発する。豚の尻尾が *como* による同等比較を用いた譬えとして言及されている点は看過され、インセストの罪悪という抽象的な主題が前景化されてしまうのである。だが、具体的な状況を確認するならば、子供たちの奇行を豚の尻尾と同様に恐ろしいものと感じているのはウルスラである。だとすれば、原罪といった普遍性を装った主題を指摘する前に、子供の行動を奇行とみなし豚の尻尾になぞらえるその価値観が問われる必要がある。その価値判断が問題となるのは、後に詳らかにするように、彼女が一家の道徳規

範の象徴を担っているからだけではなく、その判断の根底に作品世界を支配するラテンアメリカの人間観が根付いているからである。

以上の問題意識の下、本稿の目的は周縁化される豚の尻尾の表象に着目した上で、作中を貫く動物化の主題と修辞という見地からその意義を明らかにすることである。本論第1節では、先行研究を概観した上で、それらに対する本稿の位置づけを示す。第2節では、豚の尻尾の表象を小説技法の見地から考察する。具体的には、反復の主題と技法という初期の批評から論じられてきた問題を、核と触媒という物語論の概念を用いて分析し、作中で周縁の位置に置かれる尻尾の表象に着目することの物語構造上の意義を示す。第3節では、この豚の尻尾を先住民文化という社会的に周縁化された存在の表象として考察し、帝国スペインの言説を二重写しする語りの特徴を明らかにする。第4節では、豚の尻尾に表象される先住民文化の主題が、物語のクライマックスとなる性愛の描写において、いかに動物化の修辞として顕在化するのかを分析する。それらの分析を通じて、主軸となるインセストのプロットに潜在する動物化というより包括的な主題を明らかにし、その性愛を描く造語表現を、忘却の周縁に置かれた先住民文化と植民者の言語であるスペイン語の拮抗点として解釈する。

I 先行研究の批判的検討と本稿の位置づけ

豚の尻尾を巡る議論において、なぜインセストを軸とする読解が問題となるのか。この読解が西洋文化の伝統と親和的である点がまず指摘できるが、加えて西洋中心主義の枠組みに基づき普遍化を志向する議論が作品細部の抽象化と軽視につながることも問題となる。この点を確認するために、以下先行研究を概観していこう。『百年の孤独』の出版から間もない初期の批評に、エディプス神話に基づく普遍的な物語を読み解く神話批評があるが (Cotelo 1967: 21; Arnau 1971: 88)、古代ギリシャの戯曲という規範的古典に由来していることは言うまでもない。こうした神話批評の前提は、20世紀の産物である精神分析批評を援用した文学研究にも共有される。例えば、安易な作品

の神話化や心理学的解釈から距離をとり、ガルシア＝マルケスの文学をラテンアメリカの社会的現実には位置づけて議論するバルガス＝ジョサをもってしても、『百年の孤独』のインセストを論じる際に、フロイトのエディプス・コンプレックスに依拠している点で軌を一にする (Vargas Llosa 1971: 574-75)。ユングの議論に基づく『百年の孤独』の解釈にしても (Caballero Benjamín 1987)、ユングが強く関心を寄せた錬金術という中世ヨーロッパの文化にインセストを結びつけている。こうした心理学的解釈と並行して、インセストという見地から『百年の孤独』を欧米の文学的伝統の系譜に位置付ける研究も展開されてきた (Levine 1971: 711-23)。

他方、批評理論が趨勢を支配した 1980 年代以降の英語圏の研究に顕著なのが議論の抽象度の高さなのだが、これは作品の具体的な記述内容の軽視という問題点を伴う。例えば、近親間の性交というインセストの意味を拡大解釈して、同質性の維持という主題を指摘する研究がある (Inclendon 1986)。だが後に詳しく論じるように、豚の尻尾という具体的な記述を重要視する方向に向かうことはない。

以上の抽象化する議論の傾向と、それに伴う西洋中心主義的な枠組みこそが、作家をして批評家嫌いのスタンスを取らせた一因であると考えることができる。旧知の友人アプレヨ＝メンドーサに対し、『百年の孤独』を壮大な人類史の寓話とみとがる批評家に反して、自分の幼少期と一族の問題に作品の着想を得たと述べている (GGM 1982: 103)。これは作家の批判的姿勢の一例とみなせるが、これに加えインセストという見地から見て示唆的なのが、ガルシア＝マルケス自身から公式の伝記作家とお墨付きを得たジェラルド・マーティンの伝記である。作家の家族を情報源とし、「素性の定かでない血統から」“From Origins Obscure” という題の序章で語られるのは、共通の祖母を持つという母方の祖父母の近親婚であり、その罪悪感が豚の尻尾をもつ子供への恐怖になぞらえられる (Martin 2008: 5-7)。作中の近親婚が作家の家族史にその端緒を持つことが示されることで、西洋中心的な普遍化に基づく領有的解釈や議論の抽象化を相対化しそれに対抗する批評になってい

ると考えられる。

以上のようなインセストをめぐる活発な議論に対し、豚の尻尾そのものが付け足し程度の扱いか受けてこなかったのは、作家自身そうした態度を表明してきたことにも一因があるかもしれない。例えば、『百年の孤独』出版直後に、ガルシア＝マルケスは、アマランタがインセストを行う気質を備えていたと説明するために、豚の尻尾を持つ赤子を産む可能性がありえたと述べている (Durán 1968: 27-28)。ここに窺われるのは、豚の尻尾をインセストの実現可能性の印としか見ていない作家の認識である。とはいえ、作品外で作家が述べるのが作者の創作した作品の全てを説明する訳でもない。実際、『百年の孤独』にはインセストの符号として読むだけでは説明のつかないくだりがあるのは先に見たとおりである。

以上の先行研究におけるインセストへの強い関心と細部の軽視を踏まえた上で、本稿は、豚の尻尾の生えた人間という事実が指し示す、人間の動物化という主題を議論の軸に据え、周縁化される尻尾の表象とその作品構造との関係において『百年の孤独』を読み解くことを目的とする。その上で次に、動物化という論点を説明するために、この言葉を動物と変身という二つの要素に分解し、先行研究に対する本研究の位置づけを示したい。動物から人間への変身という見地から豚の尻尾を論じる研究もまた、西洋の文化的伝統に『百年の孤独』を位置付ける。例えば、西洋古典の代表たるオヴィディウスと比較しながらガルシア＝マルケスの作品を論じ、豚の尻尾を『百年の孤独』を支える動物化の主題の一つと評する議論はその典型である (Robinson 2013: 156-58)。

こうした議論に対し、本稿は『百年の孤独』における動物化の主題と修辞が、舞台となる土地の歴史と文化的風土を抜きにして論じることはできないという見解をとる。それは、独立前の植民から国家の独立と近代化、千日戦争や米国帝国主義の先鋭たるユナイテッド・フルーツ社の支配や暴力的なストライキに至るまで、『百年の孤独』がコロンビアひいてはラテンアメリカの歴史に呼応する出来事を作品の不可欠な構成要素としているからというだ

けではない。動物化という事象もまた、土地の歴史に深く根付いた意味を帯びているのである。この意味で、本稿の取る立場は、社会的危機に瀕して生じる自己と世界の関係の変化が変身という形を取り顕在化するという主張に基づき、20世紀ラテンアメリカ小説の変身譚に分類される作品を対象に議論を展開するナンシー・グレイ・ディアスと軌を一にする（Díaz 1988: 3-10）。本稿は、変身譚の枠組みを広くとり、豚の尻尾を持つ赤子の出産とそれにいたる過程としての一族の歴史もまた、そのバリエーションと考え議論を行っていく。

他方、本稿の主題を変身ではなく動物化としている点に留意されたい。この語用は、動物の表現に着目する先行研究への応答という側面もある。ジャック・ジョセはガルシア＝マルケスの作品における動物について、①実際の動物、②人工の動物（動物の飴など）、③動物の直喩、④動物の暗喩、⑤神話上の動物と5つに分類している（Joset 1974: 65-87）。また、近年の研究では、アナ・クリスティーナ・ベナビデスが作中人物の造形と行動の形容に用いられる動物のイメージを分析し、それを作中の主題に関連付ける。ベナビデスによれば、作品の主題である孤独に苛む作中人物が、人間性を失っていく様子を表現するのに、動物の比喩が使われており（Benavides 2014: 241-247）、その極致として他者の認識ができずに孤立に陥ることへの恐怖を、豚の尻尾やさまよえるユダヤ人という人間と動物のキメラが具現している（Benavides 2014: 256-257）。

動物の描写と修辞への着目において共通点を示すこれらの先行研究は、しかしながら、作品の個別の要素の分析で終わっている。とくに『百年の孤独』に関しては、動物表現と物語構造との有機的な関係を十分に考察していない。とくに豚の尻尾に代表される動物化表現は、議論を先取りして言えば、人間性と対置して劣位に置かれる動物性のアレゴリーとして特徴づけられ、その前提にスペイン植民者とその子孫の価値観がある。本稿が問うのは、この人間性の境界が小説全体の語りと不可分に結びつく動物化の表象を通じていかに描かれているかという問題である。

以上の要点を整理すると、本稿は動物化の主題と修辞という見地から『百年の孤独』を読み直すことで、インセストの解釈を西洋中心主義的な普遍神話の地平に還元せず、ガルシア＝マルケスを生み出し舞台とした土地と社会の問題が豚の尻尾に代表される動物化の主題と修辞に複雑に絡み合っている状況を検証していく。この本稿の目的を明確にした上で、本節の最後に議論の範囲を限定しておきたい。先に引用した第3章のくだりとは別に、性愛の含意を持たない尻尾のくだりがもう一つ、第9章に登場する。ウルスラが軍人として暴走する息子アウレリャノを諫め、兄弟同然のヘリネルド・マルケスを銃殺することを止め、その結果独裁者の道を歩むことを踏みとどめさせることになった場面で、彼女は息子の非道を豚の尻尾にたとえる (GGM 1967: 206–207)。このくだりは、作家がインタビューで言及するような (GGM 1982: 105)、『族長の秋』 *El otoño del patriarca* (1975) の族長とアウレリャノの類似性を暗示し、人間性から逸脱した人外のような独裁者になりえた可能性を示している。換言すれば、非人間化という意味での動物化を具現していると言え、本稿の議論の俎上にあがるべきなのだが、紙幅の都合により稿を改めたい。本稿の焦点は、先の引用で確認された先住民の問題と豚の尻尾の表象の関係に置かれている。その上で、以下の議論で明らかとなるのは、先住民の主題がアマランタをはじめとした女性の描写に伴う動物化の修辞を通じて展開する、そのプロセスに窺われる作家の筆致の特色である。

II 反復と周縁化: 『百年の孤独』の物語構造における核と触媒

豚の尻尾それ自体の意義を軽視してインセストに関心を寄せる先行研究の傾向は、単に読む側の態度だけに問題の所在が求められるべきではない。何よりもまず『百年の孤独』という小説がそのような傾向を生み出す物語構造を備えていることは確認しておく必要がある。この構造をまずは反復という点から検討しておきたい。『百年の孤独』において反復は主題としても技法としても重要な役割を持ち、例えばバルガス＝ジョサのガルシア＝マルケス論に代表されるように (Vargas Llosa 1971: 638–653)、先行研究でも早くから

議論されてきた。インセストが作品の中核をなす反復的な構成要素であるのは明らかで、その欲求とそれに伴う近親間の濃密な関係性が一族の歴史に繰り返し生じ、同時にその実現を妨げるべく、インセスト禁忌の象徴として豚の尻尾も作中人物の口から何度も言及される。だがここで指摘すべきは形式的な反復が意味内容の点で重要な反復として読者に認識させるわけではない点である。本稿冒頭の引用を再度参照されたい。豚の尻尾を巡るくだりは、インセストと関係したもののだけがその反復性の意義が認識される一方、そうではないくだりにおいては形の上では同じ表現が繰り返されていても、インセストが軸となる本作において、その意義は前景化されない。それ故に第3章や第9章の豚の尻尾の意義は看過されてきたのである。

この反復の問題をさらに掘り下げることあたり、物語論の枠組みを用いて、核と触媒という物語の構成単位から分析したい。ジェラルド・プリンスによれば、核はそれに変更がなされると物語の筋が変わってしまう物語の構成要素であり、触媒は作品世界の雰囲気やイメージを彩るものの、それが変わったり失われたりしても物語の筋に影響を及ぼさない要素と定義される(Prince 2003: 11)。この分析枠組みを『百年の孤独』に適用してみると、インセストに関係し反復の意味を求められる尻尾のくだりが核、そうではないエピソードに関わるものを触媒とみなすことができる。仮にインセストに関わるエピソードが作品からなくなったとすれば、インセストの結果豚の尻尾を持つ子供が生まれるという物語の筋書きが成立しないか、少なくともその反復の因果の変更は免れない。他方、そうではないくだりがなくなったとしても、近親間の性愛関係という物語の骨格に影響がないかのように見えてしまう。この意味において、インセストに結びつく豚の尻尾のくだりが物語の中核を構成するのに対し、それ以外のは物語の構造上周縁に置かれていると言える。

この周縁化されたエピソードに関して、核と触媒という分析枠組みを発展させた文芸批評家フランク・カーモウドの物語論を参照しつつ考察を深めたい。カーモウドによれば、文学作品は物語のシークエンスと秘密から成る。

物語のシークエンスとは、核によって構成されるプロット、すなわち作中の出来事の通時的な連鎖と因果関係を指し、それらの展開に影響を及ぼす作中人物の性格造詣にも関わる筋書きのことである。それに対し、秘密とは触媒として作中に断片的にちりばめられた記述の意匠のことである。連続性を持たずプロットと一見関係なく、中核的なエピソードの間隙を埋めているだけの書割のように見え、読書行為において無意味な泡沫として解釈から排除されてしまう要素と言える。だが、物語のシークエンスを追って満足するだけの普通の読者に対し、作品を批判的に読む注意深い読者にとっては、この断片化された触媒は解釈を誘う謎となる (Kermode 1980: 89)。この物語論を『百年の孤独』に応用するならば、インセストに関する一連の出来事がシークエンスに対応する。作品序盤でインセストが忌避すべき行為として提示された後、その欲求が一族の歴史において反復的に顕在化した果てに、インセストの結果豚の尻尾を持つ子供が生まれ、それが小説の幕を閉じる結末となる。このような展開こそが、物語の軸となる筋書きを構成している。それに対し、インセストと結びつかずに物語の泡沫に見えてしまう尻尾のくだりが読者の解釈を待つ秘密だとすれば、どのように読むことができるか。議論を先取りすると、この秘密はインセストのプロットから独立した別の主題を提示するのではなく、豚の尻尾に代表される動物の表象を通じてインセストのプロットも包摂する動物化の主題を展開する鍵となる。この点を念頭に置き、次節では本稿冒頭で引用した尻尾のくだりを序盤に置く『百年の孤独』第3章を詳しく読み込んでいきたい。

Ⅲ 語りの二重構造：先住民文化の周縁化とスペイン語文化の支配

アマランタとその甥アルカディオが先住民言語を用いてスペイン語を話さないことをウルスラが奇行とみなし、近親婚を巡る逸話に由来する豚の尻尾にたとえる際、このくだりは二重の意味で周縁性を示唆する。第3章に登場するこの豚の尻尾の表象は、インセストを中核とする物語において周縁的な位置に置かれているだけにとどまらず、作品世界において周縁化される先住

民文化も具現しているのである。

この二重の周縁性を巡る議論を展開していくのに際し、まずは先住民文化に関する先行研究の議論を整理しておきたい。本稿第1節で確認したような西洋中心主義の趨勢のもと、ガルシア＝マルケスの作品における先住民文化の問題は長らく看過されてきた。だが21世紀に入り、その研究上の周縁性を問い直す議論が展開されている。これらの議論は、作家が2002年に発表したその自伝で言及しているグアヒラ語のくだり（GGM 2002: 74–75）を論拠とし、幼少期における先住民文化の影響を指摘しており（Bravo Mendoza 2009: 39; Moreno Blanco 2015: 45–46）、その意味で自伝の出版が新しい動向の契機となったと言える。ブラボ＝メンドーサは、音楽や旅芸人といった作中の要素や Francisco el Hombre などを取り上げ、ガルシア＝マルケスの作品における先住民グアヒラの文化遺産の意義を主張した（Bravo Mendoza 2009）。モレノ＝ブランコは、ガルシア＝マルケスの作品、とくに『百年の孤独』における先住民ワユーの文化的遺産を論じるにあたり、構造主義批評の手法に基づく精緻な分析を展開する。その際、先行研究を概括し、とりわけ評伝における先住民の記述の欠落を批判する。その上で、上記の自伝や作家の家族のインタビューから、幼少期のアラカタカの屋敷でワユー族の召使からその文化の口頭伝承がなされていた可能性を探る（Moreno Blanco 2015: 17–86）。

これらの批評は、1990年代に入って下火になった『百年の孤独』に関する神話批評に対し、先住民文化の神話という論点を新たに持ち込んだという点において批評史上の意義を指摘できる。しかしながら、これらの批評は、先住民文化の遺産を重要視するあまり、作品世界における先住民の低い社会的地位とそれに伴う差別の問題を後景化してしまう点において問題を孕んでいる。この点が問題となるのは、先住民言語の使用を豚の尻尾に例えるウルスラの発想を分析するにあたり、その前提となる階層意識が問われなければならないからである。この点に関して思い起こされるべきは、『百年の孤独』の作品世界における社会階層について、インディオないしは先住民グアヒラ

がその底辺に置かれているというバルガス＝ジョサの指摘である (Vargas Llosa 1971: 561)。加えて、バルガス＝ジョサはガルシア＝マルケスの作品世界マコンドにおける先住民の扱いを取り上げ、支配的なマジョリティの認識において、先住民が人間ではなく動物扱いされていることも取り上げている (Vargas Llosa 1971: 336-337, 376)。ここでは『落葉』 *La hojarasca* (1954) における “Era una curiosa farándula con caballos y gallinas y los cuatro guajiros (compañeros de Meme) que habían crecido en casa y seguían a mis padres por toda la región, como animales amaestrados en un circo.” (GGM 1954: 49) というくだりを参照すれば、傍証としては十分であろう。語り手の一人であるイサベルの視点から、先住民が馬や雌鶏などの動物と並置され、サーカスの動物にたとえられている。こうした表現に示されるのは、動物を下位に置く人間中心主義と社会階層に基づく差別化の視線が結びついた人間観である。端的に言えば、マコンドにおける人間とは支配的な階層を形成する植民者の子孫のことなのである。

とはいえ、動物に対する人間中心主義を指摘するだけでは、豚の尻尾が先住民に対する差別意識の反映であると説明することはできても、なぜスペイン語を話さずに先住民言語を話すアマランタのような子供の振る舞いが、単なる動物のたとえではなく、とくに物語の中核をなすインセストのシンボルでもある豚の尻尾にたとえられなければならないのか、という問題を十分に論じたとは言えない。この使用言語の問題を掘り下げていくにあたり、もう一つのガルシア＝マルケスの作品『愛その他の悪霊について』 *Del amor y otros demonios* (1994) を参照し、この第3章のエピソードとの比較を通じて示唆をもたらす類似点を示したい。この中編小説は、植民地時代のカリブ海に面した町を舞台として、侯爵の娘シエルバ・マリアが犬に噛まれ狂犬病に罹患したことで悪魔憑きとみなされ、数々の悪魔祓いの果てに命を落とすという展開を物語の主軸の一つとしている。この中編小説では、ブエンディア家の子供の世話をするカタウレやビシタシオンのような、グアヒラ出身の先住民の召使は登場しない。その代りの位置を占め、シエルバ・マリアの面倒

を見ているのは黒人奴隷の女中である。アマランタやその甥のアルカディオが召使からグアヒラ語を学びスペイン語を使わなかったのと同様に、シエルバ・マリアはスペイン語を話すより先に女中の話していたヨルバ語を使いだす。これこそがその他の奇矯な言動と併せて悪魔憑きとみなされ悪魔祓いを受ける原因となる。両親の無関心から黒人奴隷の女中が面倒を見ていたという構図は、『百年の孤独』において、親が何者なのか知らされず、動物の餵細工の商売に夢中になっていたウルスラからも顧みられず、寂しい幼少期を過ごしていたアルカディオが先住民言語で召使と心を通い合わせていたという構図と相似形をなし、言語使用の問題が養育者からの愛情の欠落に由来しているという点で類似している。この共通点をおさえた上で、動物化の主題という観点からとくに目を引くのは、シエルバ・マリアが狂犬病に罹患し悪魔憑きとみなされる点である。狂犬病のエピソードに暗示される動物化の主題、より正確に言えば植民地のキリスト教社会で非人間化を強いられる物語世界の価値観こそが『百年の孤独』とのより重要な対比をなす。その対比が示唆するのは、スペイン語を話さずに従者の言語を話していることが動物化の表象を伴い、非人間化という主題を示すという共通点である。

以上のスペイン語の使用という問題を念頭に置いた上で、以下豚の尻尾のくだりをめぐる『百年の孤独』第3章の分析を行うが、まずは粗筋を確認しておこう。マコンドへの移住を経た後、出奔して行方不明になった長男を探す旅に出たウルスラが、大勢の移民を連れて戻ってきた前章の結末を受け、原始的な共同体としてマコンドが発展する様子が描かれていく。章の結末に政府から町長として任命されたアポリナル・モスコテが登場し、次章以降、国民国家の歴史という網の目に絡め取られ近代化の波に吞まれていく発端となる。第3章の中核を成すのが、町全体を巻き込む騒動を生み出した忘却の病であり、この病を巡りいわゆる魔術的リアリズムの実例となる奇怪な出来事が陸続と描かれる。

先にも触れたとおり、第3章の豚の尻尾のくだりは、章の序盤で示される。グアヒラ地方からやってきてブエンディア家の女中として働くビシタシ

オンが、ホセ・アルカディオの残した私生児アルカディオの面倒を見ることとなり、その結果幼いアマランタとともに、スペイン語を話さず先住民言語だけを話すことになる。尻尾のたとえは、そうした子供たちを危惧するウルスラの口から発せられたわけだが、使用言語という見地から注目すべきはその直後のレベーカーの登場の先ぶれになっている点である。ブエンディア一家のもとに連れられてきた折には、無口であったレベーカーが一家に引き取られたのち、先住民の言葉と同様にスペイン語も流暢に話すことが明らかになってから間もなく、新たな家族の一員とみなされる (GGM 1967: 59)。このくんだりでは、得体のしれぬ出自にもかかわらずスペイン語を話すことができるという事実がクリオージョとアラゴン人の子孫 (GGM 1967: 31) たるブエンディア一家への同化を促したことを示しており、先住民言語を話すことで豚の尻尾にたとえられる子供たちと対照を成す。この意味で、子供たちの動物化に対して、レベーカーの人間化という主題を見出すことができる。

レベーカーの意義は、スペイン語話者であることだけにとどまらない。この点を掘り下げて考察するにあたり注目したいのが、レベーカーがマコンドに不眠と忘却の病を持ち込んだ感染源となったことである。グアヒラ地方で蔓延していたこの伝染性の病は、不眠状態が続いたのち、幼年時代の記憶に始まり、物の名称と観念、最終的にまわりの人間の身元や自己の意識と順に失われていき、一種の痴呆状態に陥ると言い伝えられたものである。この伝染病を巡り本稿の関心から興味を引くのが、アウレリャノの取った対抗策である。彼は町中のも一つ一つにその名前を記したメモを貼り付け、さらにはその用途まで書いてまわるものの、その書かれた文章の意味すら忘却の危機にさらされてしまう。この忘却との戦いは記号と意味内容が乖離していく状況を示しているという意味で、メモに用いられた言語、即ちスペイン語の危機であったと解釈できる。

こうした支配者の言語の危機が、先住民の住んでいたグアヒラ地方からやってきた伝染病によってもたらされたことは、歴史的な象徴性を帯びている。ルシラ・イネス・メナによれば、この不眠症は、植民者の侵略によって

その文化的基盤が根絶され忘却に追いやられた先住民の歴史を象徴するとともに、マコンドにその病の脅威が押し寄せることをその後訪れる国家や米帝国主義というネオ・コロニアリズムによる前近代社会への侵略の予兆となり、暴力の歴史の円環を暗示する (Mena 1979: 201–202)。さらにこの不眠症を解決に導いたのがメルキアデスであったこともまた植民者の文化と先住民文化の関係を象徴的に暗示していると考えることができる。再度メナの言を引くならば、メルキアデスは前コロンビア期の神話の英雄の数々のふるまいを反復していると同時に中世以来の西洋文化の伝統の権化でもあり、共同体を進歩に導く使者の役割を果たしている (Mena 1979: 148–150)。こうした解釈を踏まえた上で強調したいのは、筆記者としてのその役割である。作品結末でブエンディア一家の歴史を予言していたことが明らかにされることは有名だが、その羊皮紙につづられる物語は、アメリカ大陸にスペイン語をもたらした植民者の子孫の歴史であると考えられる。言い換えるなら、言葉の意味とその指示対象たる事物との乖離という病の蔓延を食い止めたのが歴史記述者メルキアデスであり、記録に残されず忘却の辺土に追いやられた先住民文化と対をなす。この意味において、この健忘症の顛末は、先住民文化という古層の上に重ね書きされる植民者の歴史と彼らの用いる言語の基盤となる西洋文化の存在を暗示していると言える。

以上の解釈により、レベーカーは忘却の辺土に追いやられた先住民文化の記憶を一時的に共同体に呼びさます役割を担っていたと考えられる。ただここで注意を促したいのは、そのレベーカーの出自の曖昧さであり、その名前である。レベーカーはあくまでグアヒラ地方からやってきた人物であるというだけに過ぎず、そもそもその出自が先住民であるか否かは作中では明示されていない。この曖昧な出自について、その名を根拠としてユダヤ人である可能性を指摘する批評もある (Levine 1971:720)。旧約聖書の創世記にも記される名前を持つだけで、彼女がユダヤ系の出自であると断定する証拠にはならないが、なぜユダヤ系の名を与えられているのか、という問いを立てることはできるだろう。

この問いをめぐる示唆をもたらすのがジョン・インクレドンによる『百年の孤独』論である。インクレドンは、ジャック・デリダの理論を援用し、ガルシア＝マルケスがサルミエント以来の〈文明対野蛮〉というラテンアメリカの支配的な思想的二項対立の脱構築を行っているという議論を展開する。作品世界で策定される内部＝文明と外部＝野蛮の境界が、その根本的矛盾故に維持されることなく崩壊するというデリダ流の脱構築主義的な議論自体は、先に触れたとおり、1980年代の批評理論に依拠する論文の典型として図式的に過ぎる難点がある。だが本稿の関心から参照したい論点がある。それは、作品世界において内部と外部の境界を策定するそのロジックがイベリア半島の征服、アメリカ大陸の支配と植民地化を支える帝国スペインのイデオロギーの反復であるという主張である (Inledon 1986: 58-59)。こうした発想自体は『百年の孤独』研究において新奇なものではない。『アマデイス・デ・ガウラ』に示される中世スペインの騎士道精神を、時代錯誤的に新世界を舞台とする作品世界に重ね描きする手法を指摘する批評 (例えば Vargas Llosa 1971: 264-273 を参照) と軌を一にして、新世界の物語を旧世界の言説によって記述するという物語手法の特徴を指摘していると評することができる。以上の解釈を念頭に置いた上で、マコンドを支配していた不眠症が、メルキアデスがもたらした薬によって駆逐されて行くことを伝える次のくだりを読み解くと、不可解に見える語彙の意義が明らかになる。

Mientras Macondo celebraba la reconquista de los recuerdos, José Arcadio Buendía y Melquíades le sacudieron el polvo a su vieja amistad. El gitano iba dispuesto a quedarse en el pueblo. Había estado en la muerte, en efecto, pero había regresado porque no pudo soportar la soledad. (GGM 1967: 66, 強調引用者)

死んだはずのメルキアデスが孤独に耐えられなかったので黄泉からかえってきたというこの有名なエピソードは、死者の復活という超現実的な出来事を

自然な現実として描く魔術的リアリズムの特色の一例としてよく参照される。だがここで注目したいのは、reconquista という奇妙な言葉遣いである。単に記憶の回復を示すだけなら、たとえば *recuperación* といった語が使われていれば違和感を読者に抱かせることはなかったであろう。にもかかわらず、なぜこのような不自然に響く語が敢えて採用されているのか。こう問うならば、旧世界の言説の重ね描きという語りの特徴を踏まえると、この不眠症を巡るエピソードがスペインの領土回復という歴史事象を暗示する語彙で描かれていると答えることができる。ここに示されるのは、帝国スペインの歴史に基づく言説の重ね書きである。その末裔である植民者の築き上げた社会の秩序の回復にレコンキスタという語彙を与える小説の語りは、野蛮な外部の位置に置かれるムスリムと周縁化される先住民文化を二重写しにしていると考えられる。

以上の解釈を踏まえた上で、レベーカーの名前に戻ると、ユダヤ人という出自の可能性を暗示させるその名は、レコンキスタを巡る歴史における *marraño*、即ちキリスト教に改宗したユダヤ人の蔑称を連想させる。レベーカーは、先住民の住んでいた地域から到来し、先住民言語とスペイン語のバイリンガルで、ブエンディア一家というキリスト教徒の一家に同化することになりつつも、壁を食うなどの数々の奇行を示す。こうした設定は、スペイン植民者の子孫の支配的な社会に移り住む先住民の社会的な地位の低さや差別を暗示するが、さらにその名が改宗したユダヤ人の文化的二重性を重ね書きする機能を担っている。加えて、先住民言語しか話さないことを豚の尻尾になぞらえるくだりに続いてレベーカーが登場することも、豚肉を食べるのを禁じるユダヤの律法に由来するマラーノ（豚）という字義に呼応する形で、豚の連想を喚起する。この連想を突き詰めていくと、ホセ・アルカディオと擬似的な兄妹として性的関係を持つ予兆となり、近親婚と豚の尻尾の結びつきを反復的に暗示していると言っても過言ではない。

本節を締めくくるにあたり、これまでの議論を語られる出来事と語る言葉の関係、言い換えるなら物語の内容と形式の関係という見地から整理してお

きたい。『百年の孤独』第3章は先住民言語を話すアマランタとその甥のアルカディオが豚の尻尾になぞらえられていることから、植民者の子孫とその言語であるスペイン語を規範とする社会において、劣位に置かれる先住民への差別意識が暗示される。加えて、その先住民言語を話す植民者の子孫もまた動物化のイメージを付与され、人間の枠組みから逸脱する状況が示唆されていた。不眠症がスペイン植民者の征服によりその基盤を失い、忘却の縁にあった先住民文化の歴史を象徴するとすれば、メルキアデスによって取り戻された記憶はその支配を再確認する意味を持つと考えられる。更に、この豚の尻尾を巡る言語のエピソードの顛末は、小説の中盤を過ぎて第13章冒頭で、ウルスラの過去の回想として、二人の子供が先住民言語を忘れスペイン語を習得したと手短かに示される (GGM 1967: 296)。その言及の簡素さは、国家の正史に記録されずに忘却された先住民文化の周縁化を如実に体现していると言える。このように『百年の孤独』は先住民文化の存在を周縁化する物語構造を備えているのだが、語りの語彙においてもそのような抑圧的な性格を保持している。レベカーがユダヤ系の名前を持つことは、忘却の縁に置かれる新世界の先住民の歴史と存在を暗示しながらも、インセストに結び付く豚の連想を喚起しながら、旧世界の言説で包み込む語りの二重構造の一端を担っていた。ここで再度確認すべきは、小説第3章の豚の尻尾が、作品構造において周縁化されるというその事実において、先住民文化の周縁化を二重の意味で具現していることである。

しかしながら、忘却の縁に置かれながらも、アメリカ大陸に根を下ろした植民者の子孫の社会に潜在する先住民文化の痕跡を示す役割を、豚の尻尾が担っているとも考えられる。実際忘却という形で作品世界に潜在したものは、マコンドが近代化に至る前の作品序盤のエピソードをもって決着がつく話ではない。作品中盤は伏流のように潜在し、終盤の原始的な状態に退行していくがごときブエンディア一家のエピソードに至り、動物化の修辭の展開を経て、豚の尻尾を持つ赤子の出産を導くインセストの場面で回帰するのである。

IV インセストに至る展開とその描写の分析：動物化の主題と修辞

前節までの議論は、『百年の孤独』第3章において、なぜ使用言語の問題に豚の尻尾のたとえが使われたのか、という問いを巡る議論であった。繰り返すが、この問いは作品の一部にとどまるものではない。豚の尻尾を軸として、作品全体を貫き展開する動物化の主題において、その意義を明らかにする問いなのである。

以上の問題意識のもと、以下の議論では、ブエンディア一族の百年にわたる動物化のプロセスが、インセストの場面に収斂していくその展開を分析的にたどっていく。まずは問題となるその到達点から見ておこう。

Amaranta Úrsula se defendía sinceramente, con astucias de hembra sabia, comadrejeando el escurridizo y flexible y fragante cuerpo de comadreja, mientras trataba de destroncarle los riñones con las rodillas y le alacraneaba la cara con las uñas, ... Entonces empezó a reír con los labios apretados, sin renunciar a la lucha, pero defendiéndose con mordiscos falsos y descomadrejeando el cuerpo poco a poco, ... (GGM 1967: 472 強調引用者)

豚の尻尾を持つ赤子の誕生の契機となる場面の描写を読む際、読者の目を引くのは動物を示す名詞から派生した造語表現である。このくだりに目を留めた批評家の評を確認しておこう。本稿の第1節で触れたジョセは、この造語表現を動物の暗喩として分類した上で、「想像力のダイナミズムが、ありふれた言い回しという柵を破壊して新たな形式を生み出している」「la dinámica imaginaria rompe la barrera de la lengua común hasta crear nuevas formas」(Jostet, 1974: 81) と評している。この評価を是とするならば、上のくだりは、アンヘル・ラマが『百年の孤独』を特徴づける技巧の一つとして指摘した「ささやかながらも、輝きを放ち次から次へと連鎖的に絶え間ない跳躍の感覚をもたらす数々の造語」「pequeñas acuñaciones brillantes y sucesivas que se encadenan una tras otra creando la sensación de un salto continuo」(Rama 1991:

96) の具体例として挙げることもできるだろう。こうした批評家の造語表現を巡る賞賛に異を唱えるつもりはないのだが、その評価の根拠を示さないことで単なる印象批評にとどまっている点は批判したい。なぜこの造語表現が躍動的であり輝きを放つのか、その理由こそが動物化の修辞の展開の考察を通じて明らかにされなければならないのである。

このクライマックスの場面について論じるにあたり、そこに至るまでのプロセスを辿り、いかに動物化の修辞がその主題の展開を示しているか検討していかなければならない。その見地からまず注目すべきエピソードは一家の柱であるウルスラの死である。彼女は親族の豚の尻尾の逸話を持ち出したりすることで、家族の不道德を戒める一家の道徳規範を体現してきた。逆に言えば、その死は一家の道徳規範の喪失に伴う退廃の基点であったとも言える。動物化の主題という見地からみて象徴的なのは、彼女の死から2週間後、僅か2頁後に登場するさまよえるユダヤ人 *el Judío errante* である。雄山羊と異教徒の女性の雑種というキメラの様相を示すその姿は、その遺骸が逆さ吊りの見世物となる様子を描くくだりにおいて、人間の枠組みを揺るがすその性格をより露わにする。

Lo colgaron por los tobillos en un almendro de la plaza, para que nadie se quedara sin verlo, y cuando empezó a pudrirse lo incineraron en una hoguera, porque no se pudo determinar si su naturaleza bastarda era de animal para echar en el río o de cristiano para sepultar. (GGM 1967: 410)

人間とも動物ともつかない境界上の異教の存在として描かれているのがユダヤ人であることは、レベーカーの名前に暗示される連想の反復を示唆しているとも取れるが、加えて指摘しておきたいのは、スペイン語圏アメリカでは慣用的に人間という意味で使われることの多い *cristiano* という語である。『愛その他の悪霊について』に窺われるような植民地時代の価値観を継承し、キリスト教徒こそが人間であり、それ以外の存在は動物に等しいと考える人間

観を確認することができる。この価値観を前提として、さまよえるユダヤ人は、ウルスラの死の直後、豚の尻尾を持つ赤子の出産に至る動物化のプロセスの一端を象徴的に担っているのである。

動物の比喩という点に注目すると、ウルスラの死より前の長雨を巡るエピソードにも、豚の尻尾の誕生の兆しが潜在していることがわかる。メルキアデスの残した羊皮紙の解説に勤むホセ・アルカディオ・セグンドに対し、ウルスラは“*Tanto tratar de inculcarte las buenas costumbres, para que terminaras viviendo como un puerco.*” (GGM 1967: 399) と非難する。豚の直喩を用いて非難するその口調は、単に怠惰さを豚に結びつける慣用的な比喩を示すだけにとどまらず、一家の道德規範を支える彼女の役割から生じたものであり、その死が遠くない太母の口から出た豚の比喩は、来るべき豚の尻尾を持つ赤子の誕生の兆しになっているとさえ解釈できる。他方、双子の片割れのアウレリャノ・セグンドにも、同様に豚の尻尾を暗示する動物の暗喩がその身体描写において使われている。ホセ・アルカディオを思い起こさせるこの大食漢は、“*Aureliano Segundo se volvió gordo, violáceo, atorugado*” (GGM 1967: 307) と亀になぞらえられている。この比喩に連鎖する形で、食事を取ることができずやせ細っていく面貌が、“*la candorosa y abotagada cara de tortuga se le había vuelto de iguana*” (GGM 1967: 402) とイグアナになぞらえられる。このコミカルな比喩が、かつてブエンディア一族の始祖たる夫婦が近親婚のために生み落すことが恐れられたイグアナを想起させることは言うまでもない。加えて、亀からイグアナへの変身さながらの比喩の連鎖も動物化の主題を示しているかのようである。

以上の双子の描写において豚の直喩とイグアナへの変身の暗喩として交錯する動物化の修辞は、インセストを描く第19章でも反復される際立った特徴を示している。それを示すのは、具体的に言えば“*atorugado*”という暗喩である。名詞を動詞化して新語を作り出すこと自体は、スペイン語としては取り立てて珍しいことではない。その点を踏まえた上でこの造語の意義を取って問うのは、アマランタ・ウルスラの愛の営みを描くガルシア＝マルケス

の筆致が、その言語の特性を活かしきって、動物化の主題を支える独自の表現を展開しているからである。

ここで先に引用した動物名詞の動詞化の問題に戻りたい。この引用で示される動物化の修辞を考察していくに当たり、まずは作中のミクロな部分から確認し、このクライマックスに至る第 19 章での位置づけを検討し、最後に作品全体におけるその意義を論じたい。comadreja と descomadreja はアマランタ・ウルスラの身体を形容する comadreja という名詞から派生した造語である点をまずはおさえておこう。鼯という動物が示す含意としては、女性の知性と抜け目のなさを前後の記述が示しているが、併せて *escurridizo*, *flexible*, *fragante* といった形容詞と並置され動詞化されることで、身をよじらせて恋人の手から逃れる様子を暗示暗喩として、その捉えがたさを際立たせている。他方、*alacranear* という造語は、爪を立てて恋人の顔をひっかく様子が、蠍の一刺しに例えられていると考えてよいだろう。さらに引き続き蠍のイメージに着目すると、直近の文脈では、直後に続く最終章序盤で、蠍に刺されて不能になった「交霊術師」“*el nigromante*” (GGM 1967: 475) の逸話が目を引く。この些細な逸話の意味を解釈するならば、不能という形で子孫の断絶という一族の終焉を仄めかしていると考えられる。

加えてここで注意を促したいのは、交霊術師という語の音の類似性が改めて喚起する女性、アウレリャノ・バビロニアの愛人ニグロマンタである。第 19 章で唐突に登場するこのアンティル諸島出身の黒人女性は、姉のような伯母を恋慕しながらもその恋叶ぬ男にとって、その想い人の代償として愛人の位置に収まる。叶わぬ恋に身をやつす男たちの性愛の対象になる女性は、一族の歴史において繰り返し登場し、作品を特徴づける反復の主題の一端を成している。しかしながら、この黒人女性は、叶わぬ恋という反復の連鎖に現れたピラル・テルネラのような女性たちと一線を画し、インセストの成就に至るまでの書割的役割を果たすことになる。とりわけ重要なのは、アマランタ・ウルスラの愛の営みが動物を巡る造語によって表現されることと対照をなし、ニグロマンタの描写が動物化の主題を展開するのに寄与してい

る点である。先の引用にみられるアマランタ・ウルスラの身体描写同様、ニグロマンタの官能的な肉体も、“caderas de yegua” (GGM 1967: 458)、“su cuerpo de perra brava” (GGM 1967: 459) などと動物の比喩によって描かれる。さらに注目すべきは“Nigromanta lo esperaba para enseñarle a hacer primero como las lombrices, luego como los caracoles y por último como los cangrejos.” (GGM 1967: 459-460 強調引用者) という、彼女が愛人に恋の手管を手ほどきする際の描写である。como を三度繰り返すことは、作家の魔術的な語りを支える反復の技法としてバルガス＝ジョサが三度の反復という具体的な数字を挙げて分析した (Vargas Llosa 1971: 644) 技法の好例と言えるが、加えて注意を促したいのはその語りの魔術を恋の手管を修飾する動物の直喩において展開している点である。ここで学んだ手管を男が姉と慕う伯母との房事実践している蓋然性は高く、だからこそそれに応える彼女の振る舞いが動物の名詞から派生した動詞で表現されているという、修辞上の呼応関係を指摘できる。更に、比喩の種類という観点から見ると、直喩が記号とその指示対象の類似性と差異を内包しているのに対し、暗喩は字義通りにとれば記号とその指示対象の同一性を示すと言える。この意味において、動物の「ように」人間として恋の手管の手ほどきをするニグロマンタよりも、動物「として」その手管に応えるアマランタ・ウルスラの方が動物に近づいていると解釈できる。この解釈から主張したいのが、インセストの禁忌の比喩にすぎなかったはずの豚の尻尾が現実の出産として受肉化するというプロットと対応し、暗喩としての逐語的解釈を可能にする造語表現が、形而下の現象として動物化を体現しているという修辞の特徴である。以上のように、二人の女性のセクシュアリティを巡る修辞は、長雨時の双子の兄弟の描写に見られた修辞の特徴を反復し、動物の直喩と暗喩との対照を成し、豚の尻尾を持つ赤子の出産に至る性愛の場面を描き出すのである。

小説第 19 章という文脈に置いて意味を生み出すこの造語表現は、作品全体のプロットにおいてはどのように位置づけることができるだろうか。この問題を考えるにあたり、alacranear という造語の意義を検討したい。蠍の存

在は、ブエンディア家の女性たちを巡るエピソードに影のように付きまどってきた。レベーカーは結婚式の夜室内履きの中にいた蠍に足を噛まれる (GGM 1967: 118)。対照的に、レメディオス・ラ・ベージャは風呂場で蠍を踏み殺す (GGM 1967: 280)。何よりも、その謎めいたやり取り故に深い印象を残すのが、老いて失明しながらも千里眼的な洞察力を得たウルスラとその娘とのやり取りにおいて現れる蠍である。

Amaranta, que empezaba a meter la ropa en el baúl, creyó que la había picado un alacrán.

—¿Dónde está! —preguntó alarmada.

—¿Qué?

—¿El animal! —aclaró Amaranta.

Úrsula se puso un dedo en el corazón.

—Aquí —dijo. (GGM 1967: 303)

蠍の所在をその心臓に指摘する振る舞いは、直前に示されるウルスラの内省に対応している。ピエトロ・クレスピやヘリネルド・マルケスへの心無い仕打ちとみなされたアマランタの言動が、その内心における愛情と恐怖の葛藤の産物であるとした上で、後者の“el miedo irracional que Amaranta le tuvo siempre a su propio y atormentado corazón” (GGM 1967: 300)、即ち心臓に秘めた恐怖が最終的に勝利したのだとウルスラは喝破する。この文脈をおさえた上で強調すべきは、物理的事象の精神化とでも名付けられるような、会話における語用の変化である。身体を指す痛みが蠍に由来するものとされた後、「動物」という語を使い、より一般的な意味の語に抽象化された後に、その動物が心の中にいると指摘される。ここにおいて、かつて殺意を抱くほどの嫉妬をレベーカーに抱いたアマランタの内面と、その室内履きの中に置かれた蠍とを結び付け、その嫉妬がその足を刺す痛みとして具体化したという連想を可能にする。こうした蠍の連想を念頭に置いて、その名を受け継ぐア

マランタ・ウルスラのインセストの場面に戻るなら、*alacranear* という造語は、恐怖の勝利したアマランタとは対照的に、愛情が勝利して甥との関係を受け入れる女性の内面の具体化を示すと考えられる。さらに、蠟の一刺しという外的な痛みの内面化に対し、内面の愛情が動詞化された動物の造語を通じて身体の行為という外部に具現しているという意味で、主題だけでなく修辞の上でも対照を成しており、先に見た造語表現の受肉化という性格と軌を一にしていると考えられることができるだろう。

結語

本稿で最後に問われなければならないのは、以上みてきた動物化の修辞の積み重ねの果てに、なぜ造語表現が採用されなければならなかったのか、という問いである。この問いを巡り、第3節で検討してきた先住民文化の周縁化という問題に立ち戻り、第4節の議論と接続したい。社会階層の格差に基づく先住民への差別意識の反映として動物の比喩が用いられる中、とりわけ豚の尻尾に象徴される動物化の主題は、規範的な言語であるスペイン語の問題において展開してきた。一方で、スペイン語は、先住民文化の痕跡を旧世界の言説の語彙を通じて重ね書きする物語の構造を支える支配者の言語であり、この抑圧的な性格は作品構造における先住民文化の周縁化と表裏一体の関係にある。他方で、スペイン語ではなく先住民言語を話すという行為が動物化の比喩を通じて描かれることにより、その規範の逸脱がキリスト教を基盤とする植民者の人間観の枠組みを露呈する。動物化の修辞が顕在化するのは規範的な言語では表現しきれない臨界であり、スペイン語の特性である名詞の動詞化による造語を用いて動物化のプロセスを描くことは、規範的な言語による表現の模索を通じてその臨界を示していくことである。その臨界の顕在化としての造語表現に、豚の尻尾にたとえられそして忘れ去られた先住民言語とそれによって記憶しえたはずの先住民文化の回帰的な暗示を読み込むことができるというのが本稿の主張となる。

その上で最後に強調しておきたいのは、スペイン語による言語表現の積み重ねを通じて忘却された存在に迫ることとなる『百年の孤独』の語りの特質であり、これこそがガルシア＝マルケスという小説家の創作言語の特質に他ならない。先住民の周縁化をめぐる動物化の主題が、豚の尻尾に代表される修辭を軸に展開し、性愛の描写における造語表現に至ることは、先住民文化という古層を持つラテンアメリカの世界をスペイン語で書きつづる行為の限界と臨界に迫る作家の創作行為の帰結であったと結論づけて本稿を締めくくりたい。

* 本稿は、日本ラテンアメリカ学会第40回定期大会（2019年6月2日 於 創価大学）ならびに東京スペイン語文学研究会第199回研究会（2019年11月16日 於 東京大学）で行われた発表にもとづいている。フロアからいただいた質問やコメントから多大な示唆を得た。また、本稿の2名の査読者からも有益なコメントをいただいた。ここに感謝の意を記す。

参考文献

- Arnau, Carmen. 1971. *El mundo mítico de Gabriel García Márquez* (Barcelona: Ediciones Península).
- Benavides, Ana Cristina. 2014. *La soledad de Macondo o la salvación por la memoria* (Bogotá: Siglo del Hombre Editores).
- Bravo Mendoza, Víctor. 2009. *La Guajira en la obra de Gabriel García Márquez* (Bogotá: Icono).
- Caballero Benjamín, Torres. 1987. *Gabriel García Márquez o la alquimia del incesto* (Madrid: Playor).
- Cotelo, Rubén. 1967. “García Márquez y el tema de la prohibición del incesto,” *Temas*, núm 13, pp. 19–22.
- Díaz, Nancy Gray. 1988. *The Radical Self: Metamorphosis to Animal Form in Modern Latin American Narrative* (Columbia: University of Missouri Press).
- Durán, Armando. 1968. “Conversaciones con Gabriel García Márquez,” *Revista Nacional de Cultura*, núm 185, pp. 23–34.
- García Márquez, Gabriel. 1954. *La hojarasca* (Barcelona: Penguin Random House Editorial Grupo).
- . 1967. *Cien años de soledad* (Nueva York: Vintage Español).

- . 1982. *El olor de la guayaba: conversaciones con Plinio Apuleyo Mendoza* (Barcelona: Bruguera).
- . 1994. *Del amor y otros demonios* (Barcelona: Penguin Random House Editorial Grupo).
- . 2002. *Vivir para contarla*. (Barcelona: Penguin Random House Editorial Grupo).
- Incedon, John. 1986. "Writing and Incest in *One Hundred Years of Solitude*," Bradley A. Shaw and Nora Vera-Godwin (eds.), *Critical Perspectives on Gabriel García Márquez* (Lincoln: University of Nebraska), pp. 51–64.
- Joset, Jacques. 1974. "El bestiario de Gabriel García Márquez," *Nueva revista de filología hispánica*, vol. 23, núm 1, pp. 65–87.
- Levine, Suzanne Jill. 1971. "La maldición del incesto en *Cien años de soledad*," *Revista iberoamericana*, vol 37, núm 76–77, pp. 711–723.
- Kermode, Frank. 1980. "Secrets and Narrative Sequence," W.J.T. Mitchell (ed.), *On Narrative* (Chicago: University of Chicago Press), pp. 79–97.
- Martin, Gerald. 2008. *Gabriel García Márquez: A Life*. (New York: Vintage Books).
- Mena, Lucila Inés. 1979. *La función de la historia en Cien años de soledad* (Barcelona: Plaza & Janés).
- Moreno Blanco, Juan. 2015. *Transculturación narrativa: La clave wayúu en Gabriel García Márquez* (Cali: Universidad del Valle, Programa editorial).
- Prince, Gerald. 2003. *A Dictionary of Narratology*, Revised Edition (Lincoln: University of Nebraska Press).
- Rama, Ángel. 1991. *La narrativa de Gabriel García Márquez: Edificación de un arte nacional y popular* (Bogotá: Instituto colombiano de cultura).
- Robinson, Lorna. 2013. *Gabriel García Márquez and Ovid: Magical and Monstrous Realities* (Woodbridge: Tamesis).
- Vargas Llosa, Mario. 1971. "García Márquez. Historia de un deicidio." *Obras completas VI. Ensayos literarios I*. (Barcelona: Galaxia Gutenberg), pp. 109–698.

〈Resumen〉

**Reconsideración de la cola de cerdo en
Cien años de soledad:
el tema y la retórica de la animalización y la
marginalización de la cultura indígena**

Ryo YAMAUCHI

No es exagerado afirmar que *Cien años de soledad* comienza y culmina con la cola de cerdo. Sin embargo, los estudios precedentes sobre esta obra se han centrado en el argumento del incesto, simbolizado por la anécdota de la cola de cerdo, e ignorado la significación de la propia representación del apéndice animal. El problema de este tipo de discusión radica en abstraer el símbolo del incesto como pecado original de los episodios de la cola de cerdo. Los críticos, basados en el occidentalismo, se han ocupado tanto del tema abstracto del incesto, que se han visto en dificultades al interpretar la escena en que se menciona la cola de cerdo sin relacionarla con dicho tema.

En un episodio del capítulo tercero de la novela, Úrsula Iguarán se horroriza de que su hija Amaranta y su nieto Arcadio insistan en no hablar el castellano sino “la lengua guajira”, de los servidores amerindios de la familia Buendía. Úrsula considera este aspecto como una extravagante locura, algo equivalente a un hombre con cola de cerdo. Esta comparación no tiene la misma connotación sexual que la de los genitales de José Arcadio, que su madre también relaciona con el apéndice animal. En consecuencia, la imagen

de la cola de cerdo referida a Amaranta y Arcadio se ha limitado a una descripción trivial.

Sugerimos al lector prestar atención a esta representación marginada de la cola de cerdo para argumentar su significación en términos del tema y la retórica de la animalización. Mientras los críticos anteriores han analizado las figuras animales sin relacionarlas con la estructura de cada narrativa, el presente trabajo desarrolla el tema de la animalización dentro de la totalidad de la novela, con atención a la técnica narrativa de utilización de las imágenes animales. En particular, examinamos la importancia de *Cien años de soledad* en la genealogía de narrativas de metamorfosis en la literatura latinoamericana, considerando los episodios referidos a la cola de cerdo como una historia de transformación del ser humano en animal, proceso al que definimos con la palabra «animalización».

Con este objetivo, trataremos el tema y la retórica de la animalización en las cuatro secciones descritas a continuación. En la primera sección, presentaremos una visión de los estudios previos sobre *Cien años de soledad* y nos referiremos a su occidentalismo y tendencia a la abstracción en el tema del incesto. También ofreceremos una crítica a los estudios sobre las imágenes de animales desde nuestra perspectiva de la animalización. En la segunda sección, consideraremos la representación marginada de la cola de cerdo en términos de técnicas narrativas. En particular, adoptaremos el concepto analítico de núcleo y catalizador en la teoría de narratología para examinar el tema y la técnica de repetición, dos aspectos destacados desde los primeros estudios sobre la novela. En la tercera sección, analizaremos la cola de cerdo como un símbolo de la presencia marginada de la cultura indígena. Centramos nuestro análisis en el tercer capítulo de la novela, para revelar el carácter narrativo derivado de la imposición del vocabulario del imperio español en las descripciones de las personas guajiras en la periferia de la sociedad y la

historia. En la cuarta sección, analizaremos cómo el tema de la cultura indígena representada por la cola de cerdo se encarna en la acuñación de verbos derivados de los nombres de animales en el clímax amoroso del penúltimo capítulo, luego de las comparaciones y metáforas animales que subyacen en la historia de la familia Buendía.